

「大野君と杉山君」をもう一度

— さくらももこ氏の追悼に寄せて —

水 引 貴 子¹⁾ 歌 川 光 ²⁾

¹⁾ 日本児童教育専門学校

²⁾ 昭和女子大学

Once More “Ono-kun And Sugiyama-kun” :

— in Memory of Momoko Sakura —

Mizuhiki Takako¹⁾ Utagawa Koichi²⁾

¹⁾ Japan Juvenile Education College

²⁾ Showa Women’s University

抄録：近年、故・さくらももこ氏作「ちびまる子ちゃん」は小学校の道徳教材としても活用されている。本稿では、1990年に劇場公開された「ちびまる子ちゃん 大野君と杉山君」の、友情やチャムシップの性差を考える教材としての意義に触れる。

キーワード：ちびまる子ちゃん、友情、チャムシップ、ジェンダー

1. はじめに

筆者らは近年、教育・保育課程における「友達」「友情」などの取り扱い方について検討を重ねている（水引・歌川 2017、水引・歌川・濱野 2018ほか）。教科書等における友情のジェンダー表象は論点の一つとなっており（拙稿 2019）、しばしば担当授業等でもこれらの話題に触れることがある。この中で、とりわけチャムシップが始まる児童期の友情の持ち方の性差を考える学生向けの教材として再注目されたい作品がある。1990年に劇場公開された「ちびまる子ちゃん 大野君と杉山君」である。

折しも、2018年8月にさくらももこ氏は鬼籍に入った。「ちびまる子ちゃん」における友情の表象については、近年「たまちゃん、大すき」が小学校道徳科の教科書に掲載される（2017年検定教科書としては、東京書籍2017）などの形で社会的にも着目さ

れているが、ここではさくらももこ氏の「大野君と杉山君」に対する思い入れにも触れながら、同作品の教材としての意義について綴っておきたい。

（歌川）

2. さくらももこ氏と「ちびまる子ちゃん」

さくらももこ氏は1965年静岡県静岡市清水区（旧清水市）生まれの漫画家で、国民的アニメ「ちびまる子ちゃん」の作者として広く知られている。さくら氏は高校を卒業後、1984年に漫画「教えてやるんだありがたく思え！」（集英社りぼんオリジナル）でデビューした。1986年には少女漫画誌『りぼん』（集英社）で「ちびまる子ちゃん」の連載を開始し、1989年に第13回講談社漫画賞を受賞している。1990年からはテレビアニメ「ちびまる子ちゃん」（フジテレビ系）が開始され、同年には本稿で取り上げる劇

場版「ちびまる子ちゃん 大野君と杉山君」が公開された。

1991年にはエッセイ『もものかんづめ』（集英社）、詩集『まるむし帳』（集英社）を出版し、漫画家以外の仕事も数多くこなしている。他にも例えば、アニメ「ちびまる子ちゃん」のエンディング主題歌「おどるポンポコリン」をはじめ多くの楽曲の作詞を手掛け、オールナイトニッポン（ニッポン放送）のDJ、アニメ「ちびまる子ちゃん」などの脚本、「スヌーピーブックス」（集英社）の翻訳も行うなどマルチな才能を発揮した。

2012年にアニメ「ちびまる子ちゃん」が放送1000回を迎えた。2020年1月にはアニメ化30周年を迎えるが、さくら氏は2018年8月15日に亡くなる。単行本「ちびまる子ちゃん」（集英社）は17巻で完結することとなり、シリーズ累計3200万部に達している。台湾、中国、タイ、マレーシア、韓国でも出版された。

「ちびまる子ちゃん」の名前の由来は、「わたしちいさかったから“チビ丸”に女の子だから“子”をつけて“ちびまる子ちゃん”なんてよばれていたの」（さくら 1987：4）とある。ストーリーは、作者のさくらももこが小学校3年生の時の体験をもとに構成されているが、「全部私の思い出をもとになぎあわせてつくっていった作品なのですが、ときには話のつじつまを合わせるために創作したり架空のできごとや人物を登場させたりしたところもけっこうあります。」（さくら 1987：163）とも述べている。そのため、「ちびまる子ちゃん」のこぼれ話を書きたいという思いから、エッセイ集『あゝころ』『まる子だった』『ももこの話』の三部作も出版された。

作品中に多く登場する友人のたまちゃんは実在の人物であり、『ももこの話』のなかでも「小学校一年の時、同じクラスになって以来、私とたまちゃんはずっと親友だった。絵も好きだったし、動物も好きだった。お互いに、他の友達もいたが、幼い頃から私とたまちゃんの独自のノリというものは完全に確立されていた」（さくら 1998：178）と触れていることから、実生活においてもたまちゃんは大切な親友であることがうかがえる。彼女らは高校まで同じ学校に通い、卒業を迎えるまで共に過ごした。

テレビアニメの「ちびまる子ちゃん」は当初、三

か年計画であったため、1992年で一度終了するが、その後1995年に第二期が開始する。さくらはエッセイのなかで、「私がアニメのまる子に対して中途半端な気持ちで取り組んだことは一度もなかった」（さくら 1992：121）と述べ、アニメ化の仕事がさくら自身に大きな成長をもたらした。

（水引）

3. 「大野君と杉山君」における友情のジェンダー表象

「ちびまる子ちゃん」において、まる子とたまちゃんはチャムシップの関係を築いている。既述の「たまちゃん、大すき」は、たまちゃんが約束を守れなかったことがきっかけで二人の仲に亀裂が入るが、まる子が約束を守れなかったたまちゃんの立場に共感することで仲直りを果たす展開となっており、そのねらいは「あいての立場や気持ちになって、考える」（東京書籍 2017：127）ことにある。

ところで、チャムシップにも性差が存在することは繰り返し指摘されている（須藤 2010：111-120）。「たまちゃん、大すき」に見られるチャムシップも、二人ともタイムカプセルに「大好き」と書き合うように、密で情緒的だが、「自分に対する感覚の明確さや主体性・自律性を獲得するには至」りづらい（同上：115）という女子のチャムシップの特徴も同時に示している。

「大野君と杉山君」は、さくら氏がこの点を自覚し、女子の目から新鮮に映った男子同士のチャムシップを描いたものである。同作品は、まる子ちゃんが、ヤンチャなガキ大将の大野君と杉山君のチャムシップの行く末を、大野君が東京に転向してしまうまで約一年間見届ける展開となっている。今日で言えば、ガキ大将は「いじめっ子」に分類されるだろうが、さくら氏は、大野君と杉山君について、「そういう安っぽいいじめっ子じゃないんですよ（笑）。関口くんとかあのへんのB級の男の子じゃないんですよ（笑）。」（ポニーキャニオン 2001：4）とし、そのキャラクター設定について以下のように述べている。

今回の登場してくれた大野君と杉山君は、私の心の中にいつのまにか居た男の子達です。わたしが小学校時代を過ごしている間に、ああいう

ような気の合ったコンビが何人もいました。そして、片方が転校してしまう、という切ない別れをしたコンビも何組かありました。／男の子達はよくケンカをしていました。女の子もよくケンカするけれど、男の子同士のケンカはまた違ったムードがありました。／大野君と杉山君は男の子の真剣さやひたむきさや、切なさを全部まとめたような子達です。それは私が見てきた“男の子”のそれをまる子の目を通して描きたいと思ったからです。／今回私は大野君と杉山君の事を考えるたびに泣けてきました。台本の段階でも何度も“ウッ”と涙をこらえました。あの子達には憧れが詰まっているのです。作者の私が泣くのは、ハタから見ればただの“なにわ節好き”のバカな女に見えるかもしれませんが、私はあの子達の夢や希望がふくらんだり衝突したりする度に、私の“男の子”への希望や憧れ等の色々な想いがつのり泣いてばかりおりました。／あの子達は、また憧れの意味さえならないまる子やクラスメイトに憧れを運んでいきました。まる子はもちろん、たまちゃんや関口君、ブー太郎をはじめ花輪クンや丸尾君達にも心の底で憧れを感じさせる存在になっていました。／私の描くキャラクターとしては異色なふたりといえますが、大野君と杉山君が私の心のどこかにいてくれた事を、とてもうれしく思っています（さくら 1991：158-159、／は改行を意味する）。

実際に、大野君が転校の事実を杉山君に伝え、お互いに感情的に発言してしまい、直後に二人とも人目を憚って涙することになるが、その涙の理由は、

「離れてしまうから」ではなく、「“離れてても（将来いっしょの船に乗って世界中をまわるという—引用者）夢は変わらない”っていつてくれなかった」（同上：171）ことにある。さくら氏は、「男の子の真剣さやひたむきさや、切なさ」を強調するために、友情のジェンダー表象という意味では敢えてステレオタイプ的な描き方をしており、そうであるからこそ、アニメバージョンとは異質の世界観を示したものとしてスピンオフ化され、友情やチャムシップの性差を考える上では有意義な教材になっている。

（歌川）

引用文献

- 水引貴子・歌川光一（2017）「『友達』をめぐる保育内容（人間関係）と生活科、道徳、特別活動のカリキュラムの接続とその課題—2017年改訂学習指導要領・幼稚園教育要領の検討を中心に—」『敬心・研究ジャーナル』1（2）、pp.131-137。
- ・濱野義貴（2018）「友達との関係づくりをめぐる小学校第一学年の顕在的カリキュラムの検討—生活科教科書と道徳の読み物教材の比較から—」『敬心・研究ジャーナル』2（1）、pp.129-134。
- ポニーキャニオン（2001）「8Pカラーブックレット」（劇場用映画 ちびまる子ちゃん [DVD] 所収）
- さくらももこ（1987）『ちびまる子ちゃん』第1巻、集英社
- （1991）『'91映画原作特別描きおろしちびまる子ちゃん 大野君と杉山君』ホーム社
- （1992）『さるのこしかけ』集英社
- （1998）『ももこの話』集英社
- 須藤春佳（2010）『前青年期の親友関係「チャムシップ」に関する心理臨床学的研究』風間書房
- 東京書籍（2017）『新しいどうとく③』
- 歌川光一（2019）「中学校道徳教科書の読み物にみる友情のジェンダー表象」『女性文化研究所紀要』第46号、pp.97-105。

受付日：2019年4月15日

